教員からのメッセージ

人生の中の図書館

栄養学科 教授

清水 亮
SHIMIZU RYO

しばしば人生は書物に例えられます。例えば「人生の新たな一章」「人生の輝かしい 1 ページ」などなど。実は私には、私の人生が記された「自分辞典」があります。折角なので、自分辞典の索引から「図書館」を調べてみます。おや、どうやら 2 つのページに、私の人生で印象的な図書館のエピソードが書かれているようです。

1 つめのページをみてみます。大学卒業後の大学院生の頃です。車で 30 分ほどの距離にある医学部の附属図書館に、参考文献を複写するために通っています。その図書館は三階建でしたが、学術雑誌の書庫は天井が低く、少しずつ階がずれていて、四階の構造になっていました。床の一部は、建築現場の足場のような素材で、足音に気を付けながら歩いています。そんな建物のインパクト以上に印象に残っていることがあります。それは、世界中の先人達の論文が、時代を超えて集う空間に身を置くことで、科学や学問が膨大な研究の上に成り立っていることを、頭で理解するだけでなく、肌で感じることができたことです。当時の自分には新鮮な感覚で、図書館に通う運転が苦でなかったことを覚えています。

2 つめは、「映画の中の図書館」と記されています。友達にいい映画を見つけたことを自慢したくて、大学生時代が一番映画を観ていました。お気に入りの映画を何度か観ると、食事や家具などが演出として本筋を彩っていることに気付きます。図書館が印象的な映画もあります。1 つ挙げるとすれば、モーガン・フリーマン主演の「セブン」でしょうか。主人公が、ある殺人事件について自身の仮説をもとに図書館で調べ物をするシーンがあります。バッハの G 線上のアリアが BGM で流れ、仄暗い中に灯ったバンカーズランプが印象的な図書館。重厚な書籍から手がかりを探す風景が、容疑者の静かな狂信性を演出しています。ひと気のない図書館にいると、自分も未知を探索する物語の主人公になった気分になり、非日常を感じさせてくれます。映画の中の図書館が影響しているのは間違いないですね。

私の人生の中の図書館は、新たな知識を与えてくれる場所であるだけでなく、人生を知的に、ミステリアスに彩ってくれる空間の一つです。あなたの「自分辞典」の「図書館」には、どんなことが記されていくでしょうか。